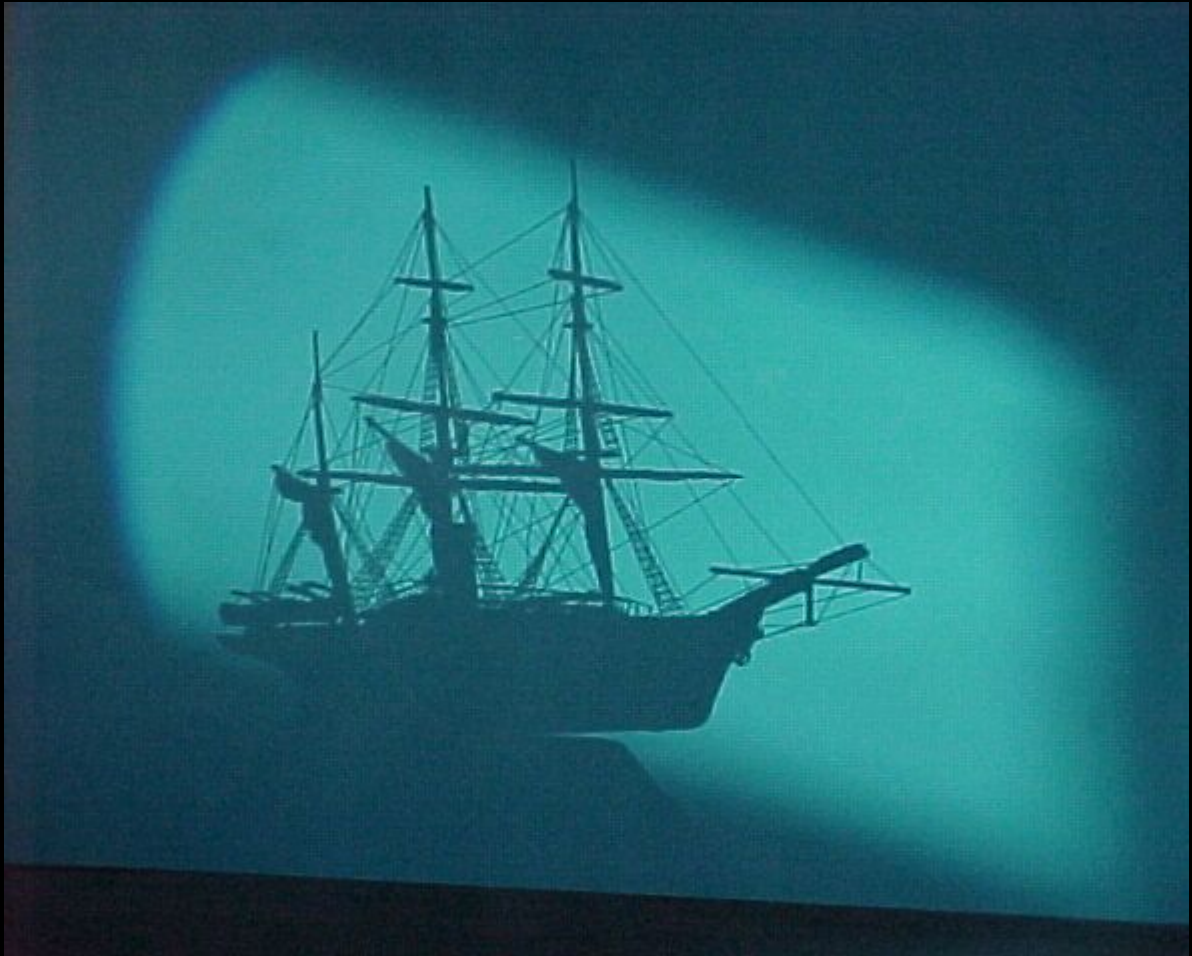


現代経済学の直観的方法

「2大要点の突破」で拓かれる経済学の最短理解ルート



電子配布 第1版

長沼 伸一郎

電子版への序文

この本の原稿が最初に書かれたのはもう十年以上も前のことになる。もともとこれは「パスファインダー物理学チーム」の内部向けの、いわば門外不出のテキストとして書かれたもので、以前にコピー原稿だった時代には、わざわざそれを読むために地方から新幹線で上京された方もあったほど人気の高いものだった。(当時の読者に東大の経済学部を出て大手証券会社に就職した人があって、今まで4年間で読まれた経済学の本は一体何だったのかと呆然としていたのを思い出す。)

そして昨今の社会状況に鑑みて、さらにそこに新たに重要な加筆部分を付け加えた形で、今回それがついに電子書籍として全文公開されることになったわけである。

・この本のコンセプトについて

この本の最初のコンセプトは、とにかく「頭は良いのになぜか経済が良くわからず、何冊本を読んでもよくわからない」という読者が、とにかくその本一冊を読めば「経済がわかる人間」になれるという画期的なテキストを何とかして作れないかということだった。

そういう人間は特に理系世界や技術者には非常に多く、そして昨今の状況ではそうした本に対する要求は非常に大きなものがあるように思われる。しかし大体その種の解説書というものはどの分野でも同じような問題を抱えていて、何と言ってもそうした入門書の場合、表面的な情報を扱うものは多いのだが、核心部分をずばり突いてくれる本は滅多に存在していないのである。

理系の本の場合だと、確かにそこには一般向け入門書(それらのオビには大抵「誰にでも理解できる」「一番やさしい入門」などの謳い文句がついている)はたくさんあるのだが、それらを読んでも、一つ二つ断片的に理解できる部分はあるものの、その知識はいずれも表面的で、本質を把握できる感じが得られない。

それらは用語を覚えるくらいの効果は期待できるものの、核心部分が理解できないため、せっかく覚えた知識も右の耳から左の耳へ抜けて、いつの間にかそのほとんどを忘れてしまうのである。

一方、核心部分を理解したいと思うと、今度はひどく難しい専門書になってしまって、1ページで歯が立たない。要するにまさにその中間レベルの最も重要な核心部分を一発で理解させてくれる本が滅多にないわけで、そこをカバーする本こそが何より必要なのである。

しかし理系の三十代以上の方はご存知と思うが、筆者の「物理数学の直観的方法」はまさに数学・物理の世界でそこをカバーすることを可能にした本で、当時の読者にそういう「夢の本」として熱狂的に歓迎されたものだった。

つまり現在われわれが目指しているのは、いわばその経済学版なのだが、そう思って眺めると、経済学の場合もやはり状況は似たようなものではあるまいか。つまり確かにここにも入門書はたくさんあって、それらを読むとトピックスのいくつかはばらばらに理解できるのだが、どれも何となく核心には迫っていない感じがしてそれら全体が頭の中で像を結ばず、そのため何度読んでもすぐに忘れてしまうことの繰り返しになってしまうのであ

る。

まあ考えてみればこういう場合、単に難しい経済用語を易しく噛み砕くという程度の本では最初からそのあたりが限度で、その壁を超えられる本となるとやはり見当たらず、むしろそういうものは存在し得ないというのが常識なのだろう。しかし敢えてそこに挑戦し、その不可能を可能にする道はないのかというのが、この本の目的である。

・この本の最大の特徴

ではこの本の特徴だが、それは何と言っても経済学を理解するためには「決定的に重要な2つの突破ポイント」があり、そこさえ突破すれば、従来は理解するのに4年を要していたものを完全な素人でも1週間で把握できるという、画期的な主張を行なっていることである。

それは単なる小手先の裏技的な説明の工夫というよりは、むしろ経済学の根本に根ざしたもので、実は経済学そのものの中に2つの重要なコアとなる部分があって、そこさえ把握すれば全体が俯瞰できるような構造になっていると考えられるのである。

それは今まではプロ向けの専門書でもうまく説明できなかったことなのだが、この場合それが「2か所」になるということ自体、論理的にきちんと説明がつくのであり、そのように一つ高い次元でその2点の関係を明確にイメージ化したことで、今まで不可能とされてきた新しい理解法への道が開かれてきたのである。

実際に、その突破点を2点に絞れたことの意義は絶大で、普通「経済学入門」ということでその入り口に立つと、学ばねばならないものが目の前に十個も二十個も並んでおり、どこから手をつければ良いかよくわからない。

それらは端から片付けようとすると息切れし、苦しまぎれに山勘で突破しやすそうな話題を一つか二つ選ぶが、それも結局外れて挫折するということになりがちなのである。

しかしこの場合、その問題の2点をまず重点突破してしまえば、残りの十数個は後から枝葉のように付け足して行けるはずなのであり、そのためこれによって、従来は完全に不可能だった「通常は4年かかる経済学を1週間で理解する」という一種夢物語であったことが現実に可能になってきたわけである。

実はこの本も十年前の最初の原稿では、まだその2点のうち的一方しか述べられておらず、それでも一応それだけの人気テキストだったのだが、十年の間にもう一つのコア部分の存在が明らかになり、その結果以前の好評だった旧版さえ比較にならないほどのものに生まれ変わる事となった。

以前の原稿では、その第一のコアに関する説明は第1章に置かれていて、その部分は以前からこのウェブでも公開されているため、それをすでにお読みになった読者もあると思われる。

この場合、第一のコアを知るだけでも一応それなりの理解は得られるのだが、もう一点のコアと併せてその全体像を知るとは、それとは全く比べ物にならないほど高いレベルでの理解を可能にすると考えられるのである。つまりそれによって、今まで経済学をほとんど何も知らなかった読者でも、僅か1週間ほどで経済学の最大の核心部分を把握できる

ようになると期待されるのであり、そして今回の電子書籍でついに残りのそのもう一方のコアが明らかにされることになるわけである。

さらに今回の電子版ではその第二のコアを説明するに際して、以前の第一のコアの話と統一感を持たせるため、新しい部分の説明でも以前に第1章で行った鉄道イメージをなるべく活用し、読者がそのストーリーの延長で理解できるように工夫してある。そして全体の構成としてはそれを旧版に加筆するという形をとり、それらの加筆分が第3章および第5章の末尾に置かれている。

今回の電子版では、何と言ってもその「2点突破」ということがメインテーマとなっており、そのため本来ならその部分だけをまとめてコンパクトな本にしても良かったほどである。しかし旧版からの残りの部分も、何と言ってもそれだけの人気を誇ってきた非常に充実したテキストであり、また電子書籍のメリットとして枚数自体を気にする必要がなく、活字の本と違って厚くなっても一応は差し支えないので、それら全部を合わせて一冊の本とすることにした。

こちらは各章ごとに貿易論や産業構造の話など、経済に関するいわば「各論」の部分について、その原理や歴史などを極限までコンパクトにまとめたものであり、詳しいことはこの後の「旧版の序文」の中で述べてあるので、そこを参照していただきたい。

いずれにせよ読者は、前者の内容を本のメインとなる「幹」の部分、そして後者の各章をそこに接木する「枝」の部分と考えて、前者を一気に読んだ後で後者をじっくり読むという形で併せてお読みいただくと、両者が相俟って素晴らしい効果を期待できるはずである。

・この本の読み方について

ではこの本の読み方について述べておくと、まずこの本の最大のメインである「通常4年かかる経済学を僅か1週間で把握する」ことのためには、読者は全てを読む必要はなく、第1章 第3章末尾 第5章末尾という形で飛び石的に拾い読みしていただくだけで良い。

具体的には第1章の全文を読んだら、次に第3章の末尾の「3.2 経済学理解のための第二の突破ポイント」へ進み、そして最後に第5章の「5.3 なぜこの本で述べた二点が最重要突破点となるのか」にジャンプすれば良いわけで、分量的には前者が約10ページ、後者が18ページほどであるから、合計で70ページ（活字版単行本の換算で約120ページ）程度である。

この部分には内容的には普通の解説書十冊分程度の内容が凝縮されていて、読者はこの僅か70ページほどの部分さえ読めば経済学の最も重要な二点突破が可能となり、お約束した「1週間での把握」ができるはずである。

そしてそのようにして最重要のコア部分が把握できたなら、今度は残りの章の内容をそこに接木していくことで、読者は十分にエキスパート・レベルにまで達することができると思われる。

こちらは貿易論や産業構造の話などの「各論」を説明したもので、各章はそれぞれを読むだけで、それらに関する最も重要な本質を把握できるはずである。そしてこちらも内容

的には各章あたり中程度レベルの経済書2～3冊の内容がそれぞれ僅か20ページほどの中に凝縮されていると言って良いだろう。

そしてそれらは分量的には全部集めれば約250ページ、活字の単行本に換算すれば約400ページもの大部に相当するわけで、そこから概算すると、普通の経済の本で優に数十冊分の内容を、これ1冊を読むだけで頭に入れられることを期待して良いことになる。

ただし分量の点で尻込みする必要は全くない。こちらを読むにも経済に関する予備知識はほとんど必要なく、自他共に認める経済音痴でその知識がほぼゼロという読者でも、まるで普通の小説でも読むぐらいのスピードで、そこに書かれた歴史的なエピソードの話などを楽に読んでいけるはずである。

少なくとも旧版時代にそれを読んだ人の例を参考にすると、通常の読者で全部読むのに1ヶ月、早い人ならこれ全部を1週間で読破することも十分可能で、それだけの時間で経済学の知識ゼロの状態からエキスパートレベルに一挙に行くことも何ら夢ではないのである。

また、経済学の体系の中では重要だが初心者には当面必要なく、エキスパートの段階に進む際に初めて必要となる部分に関しては、「付録A・B」という形でつけてある。

(ただし一つ注意をしておく、各章はどれも比較的すぐ読めるが、しかしとにかく内容の点で極めてエッセンスが凝縮されているため、短時間で読めるからと言って1日で全部を読もうとすると、さすがに頭の中で消化不良を起こす場合がある。そのため読者は先を急ぎすぎず各所で休息をとりながら読んだ方が良く、前記の最重要部分を3つの章に分散したのもそのためである。)

・最新情勢に関する分析について

この本は本来はそういう重要な基本原理の最短理解を目的としたもので、基本的には経済の最新の時事問題をリアルタイムに解説するための本ではない。しかしそれでも一種の応用問題としてそれらはやはり重要で、特に基礎を学んだ後の理解の仕上げをするにはそれに関する記述は不可欠である。

しかしそうなると、旧版の原稿にあったその部分は十年間のものであるため、電子化に際して根本的に書き直す必要があると思われた。ところが実際に読み直して見ると意外なほど内容的に古びておらず、むしろ下手に記述を最新の情勢を踏まえたものに直すと、不思議なことにかえってわかりにくくなってしまふことが多かったのである。

しかしどうやらそこには、現在の世界経済で起こっている巨大な変化の構造そのものが大きく関係していたらしい。そして同時にそこには、なぜ最近になってこれほど急にデフレというものが巨大化したかなどという問題についても、その経緯を容易に見渡す鍵が一緒に含まれていたのである。(それは大変面白い話なので第1章の末尾で詳しく述べてあり、そしてどのみち本の読み方のガイドとしても必要な話であるため、ここでもほんの少しだけ述べておこう。)

まずそもそもわれわれが何を知っておくべきかという、それは現在われわれが目に見える世界経済の巨大な変化は、実は二つの要因が混ざって起こったものだということである。ところが説明の際にそれらが混同されてしまうと話の筋が見えなくなり、現代経済

の話がひどくわかりにくいという時、しばしばそれが一つの原因となっているのである。

その二つが何であるかは本文中にも述べてあるが、ここでも簡単に触れておくと、それらは一つはグローバル自由経済という「思想」の登場、もう一つは情報テクノロジーの登場で、それらがここ20年ほどの間に十年ほどの時間差をつけて重なって起こることで、いわば二段式ロケットのような形で世界経済に激変をもたらしているのである。

そして先ほど述べた、筆者の不思議な体験もどうやらそこに原因があったらしい。それはこの大変化の場合、その基本パターン自体は前者の「第一段目」の時期に「思想」としてほぼ出尽くしていたため、むしろその時代までの話で基本論理の説明を行うと、かえって原型部分がきれいに分離されてわかりやすくなることが多いのである。そしてこの本の場合、最初の原稿が書かれた時期がちょうどその時期に当たっていたため、偶然そういう形になっていたと推察されるのである。

だとすればこの本の場合、むしろ十年前のテキストは貴重なものとしてなるだけそのまま温存し、それ以降の変化に関しては別に加筆して補うという形をとると、うまい具合に視点がちょうど十年前の時点に設定されてそこから「前」と「後」を眺められる格好になり、両者がうまく分離されて最も鮮やかに双方を把握できるはずなのである。

そのためこの電子版においてはそのような形をとっており、読者は以上の話を念頭に置いてそのメリットをむしろ積極的に捉えていただくと、時事問題に関しても抜きん出てクリヤーな理解が得られるはずである。

そうしたことは一応この本の性格上、第二優先ではあるが、これもまた本書の重要な主張の一つとなっている。

・最近の十年間の変化について

一方この二段式ロケット的な変動では、後者つまり情報テクノロジーによる「第二段目」の変化が最初の原稿が書かれた後に起こったため、本の底流をなすテーマにも多少の変更を強いることになった。

つまり十年前の最初の原稿では「資本主義の暴走をどう止めるか」という問題意識がこの本の一つのテーマとしてその底流をなしていたのだが、しかしこの「ロケットの第二段目」以降は、むしろ際限のないデフレと人員カットの問題にどう対処するかの方が重要性を増してしまったように思われるのである。

確かにこの第二段目、つまり光ファイバー網とコンピューターの登場による変化は、ある意味では第一段目ですでに起こっていた経済のグローバル化を、テクノロジーの力で単に量的に拡大したものに過ぎない。しかしその圧倒的な規模のパワーは世界全体で経済競争を次元が異なるほどに加速・激化させたことは間違いなく、過去に一つのテクノロジーがそれに匹敵する規模で世界の闘争を激化させた事例が、なかなか見当たらないほどである。

実際この、光ファイバーとコンピューターの爆発的浸透が国際社会にもたらした変動を未来から振り返ったとき、ひょっとしたらそれは、あたかも経済の世界の内部に核兵器が出現したかのような衝撃だったとも評されるかもしれない。

ある意味では現在の底なしのデフレもその結果なのであり、そのため電子版では例えば

第7章などの末尾でも、それにどう答えを出すかという観点からの加筆を行っており、その問題への展望が欲しい読者は是非参考にされたい。

なお今回の電子版では、特に新しく電子版のための後記はつけなかったが、むしろこの版では、第6章の最後に時事問題の総まとめとして加筆した部分の結末が、それにかわるものとなっており、それをもって電子版の後記とさせていただきたい。(この電子版に「後記」としてつけてあるのは実は旧版の後記で、削除しても良かったのだが一応参考としてつけてあり、これはあくまでもおまけである。)

・従来の活字本のイメージとの対応

ともあれ読者はこの本に関しては、基本的には前者の最重要部分の70ページほどさえお読みいただければ、電子書籍としての本書の目的は十分に達成されると言ってもよい。そのため読者は、この本は前者の部分だけを読むためのものとお求めいただいても差し支えない。(実際そのように考えると、価格面なども含めてちょうど150ページぐらいの厚さの活字本の感覚に近いことになるだろう。)

一方残りの部分の二百ページ以上の旧版部分も、本来ならそれだけをまとめて電子書籍としても良いほどの内容を備えたものである。そして従来の活字本の世界を眺めると、ここでは古典的著作が文庫化されて安価で読めるようになっていくことが多いが、この部分はそのようなものだと考えればイメージ的に一番近いかもしれない。

そのため前者の部分を目的とされる読者の場合、そういう本を買ったら、古典の文庫本がまるごと一冊ぼんとおまけについてきたのだと考えればどうだろうか。そういうことなら、前者だけをとりあえずお読みいただいて、後者は必要になったときに折に触れて文庫を取り出して目を通すという感覚で使っていただければ、いわば一生ものとして両者を有効に活用していただけるはずである。

いずれにせよ価格面では内容の濃さを考えると、破格の安さでそれをそれだけの知識を吸収していただけることになるだろう。

このようにやや破格の値段での提供となったが、そこまでしたのは、やはり何と云っても要となる前者の部分を、一人でも多くの技術系の読者にお読みいただきたいという強い希望が筆者の側にあるからである。

本書の第6章の結末では、現在この日本のどこに突破口の鍵があるのかに関して、実は日本の歴史の中には普段から「理数系武士団」という存在が眠っており、危機に臨んでその力をどう引き出すかが国にとって最大の希望である、ということが一つの結論となっている。

そしてそのためには現在の理系層が、従来苦手として知ることができなかった経済学の知識を身につけることは、決定的に重要な意味を持つてくる。実際、物理学と経済学を両方こなせる人間が、ある日を境に突如として万人単位で国の中に出現するとすれば、現在の日本と周辺諸国の間でその力関係そのものが大きく変わる可能性があり、過去の歴史と照らし合わせて考えると、それさえできれば中国といえども恐るるに足りないというのが筆者の持論である。

そのため筆者としてはむしろそのためにこそ、この本を役に立てていただきたいと思うのだが、しかし経済学自体に基本的に興味のない読者にとっても、それはそれで別の意味でこの本は大いにプラスになるはずである。

それというのも、この「2つのコア」を通して見える経済のメカニズムは、技術系などの世界にいるとなかなか知る機会がなく、それが一種の新鮮な思考パターンとして頭に入ってくるとなれば、目の前の技術の課題にも何らかの形でスピノフされて、新しい発想のヒントになる可能性も高いのである。

ただ、今まではたとえそういうことをしたくても、何しろ経済学を学ぶことのハードルが余りにも高すぎて、それは時間的にも無理ないわば贅沢品だったのだが、それがもし1週間でできるとなれば話は別で、まず間違いなく払ったコストや労力を上回る効果を期待できるはずである。

一方それとは逆に完全な文系読者の立場からしても、経済学の本質を最短で理解したいというとき、文系的な発想の解説書では論理が甘くて意外にその要求に答えられないのではあるまいか。そのためむしろベースが理系でそれをソフトに改めた経済学のテキストこそ、頭の良い文系読者にとってはかえってベストなものであるかもしれず、そのためそうした読者のことも考えて、電子版では難しい理系的な表現はなるだけカットしてある。

とにかく昨今の厳しい状況下、例えば今まで技術系などの職場にいて経済の知識は必要なかったが、今や自分の将来の状況がどうなるかわからなくなり、将来のためのいわば「護身術」として経済学を身に着けておきたいという読者は少なくあるまい。そしてそれをたった1週間程度で本1冊を読んでできる夢のような方法はないかと願っているなら、恐らくこの本をおいてその要求に答えられるものはあるまいと思われる。

そしてこのように長い時間をかけて進化してきた本なので、今後さらに質を上げて、究極の経済学テキストに近づけるためのご提言などをいただければ幸いです。

旧版の序文

本書は、主として次のような読者の次のような要求のために書かれた本である。

例えば一般の読書人の中には、歴史や国際経済などに関してはかなりの読書量を誇っているのに、なぜか経済に関しては見るのもうんざりで、結果的にそこだけが無知な状態のまま残ってしまっているという人が意外に少なくないであろう。そしてそういう人の多くは、その状態を何とかしたいと思いつつも、なかなかできずにいるのが普通である。

また環境問題などに取り組む理系の研究者などの場合、その多くはこの問題が結局は背後の経済構造にメスを入れねばどうにもならないことを痛感しているはずだが、さりとして経済学にまではなかなか手が回らず、思考がそこでストップしてしまうことが多い。あるいはより一般に、現在技術系の職場や学科にいる人の中にも、最近経済について理解する必要性が日に日に高まっていることを感じている人は多いものと思われる。

そしてこうした人々はその際に、これ一冊読めばとにかく経済なるものに関して大まかな粗筋だけはわかる手頃な本というものを探し回るのだが、ところがそれがなかなか存在しない。本来この種の人々は、歴史の本などならば相当高度なものでも結構読みこなす高い教養をもっており、そんな贅沢な要求ではないはずなのだが、経済の入門書のコーナーを覗くと「株で儲ける法」だの「為替取引入門」だの、およそ要求とはかけ離れた本ばかりが並んでおり、思わず早足でそそくさと立ち去ってしまうのである。

やむを得ず、正面から行くしかないということで本格的な教科書に取り組むことにして読み始めると、今度は金利がどうのこうのという話がいきなり始まってその鬱陶しさに耐えられず、2～3ページで放り出してしまうことになる。どういいうわけかそういう人々は、一種生まれながらの「非経済人」(特に理系の人々に多い)であり、経済というものから立ち上る特有の匂いというものに、強烈な拒絶反応を示すことが多い。

本書はまさしくこういう要求に応えるために書かれた極めて特殊な本であり、「骨の髄までの非経済人」がとにかくこれ1冊を読みさえすれば経済について一応の理解はできるという、本来不可能に近い要求の限界に挑戦した一つの試みである。

そしてその要求を満たすため、本書には少々特殊な工夫が施されている。まず、文体の中からそうした人々が嫌う匂いをフィルターをかけて除去することは勿論だが、それ以上に大きいこととして、通常とは全く逆の主題を設定して問題を逆方向から照射する方針をとったことである。

つまり通常の経済の解説書は、色彩の差はあっても結局は「いかに経済を繁栄させるか」という主題を巡って記述がなされている。それに対して本書は全く正反対に「成長を続けて止まれない資本主義経済をどうすれば遅くできるか」という主題を設定し、いささか天の邪鬼な視点で裏口から現代資本主義のメカニズムに迫ってみようという方針をとる。

読者にも経験はおありと思うが、今まで何度読んでもわからなかった問題が、逆の視点から見ると実にあっさり把握できるということは稀ではなく、本書はその方式の利点を最大限に活かす方針をとっている。

しかしそういう工夫をいくらしたところで、本全体が厚すぎれば結局読者が息切れして

しまつて何にもならない。そこでいかに記述をコンパクトにし、本全体を薄くするかという課題が何より重要となるわけで、そのため基本的に細かい厳密さ・正確さは最初から犠牲にして、粗筋の7割を把握できることだけを目指とする。そしてまた、おのこの課題に関しては、初学者が必ずつまづくポイントというものは大体決まっているものであり、その重点突破に最大の目標を置いている。(そのあたりのノウハウはどうやら理系も文系もあまり変わらないようである。)

そうなつてくると、広範囲な経済の問題の中で突破すべきポイントをどう効率良く選択するかが一つの鍵となる。本書の場合その1～6章の目次は

1. 資本主義経済はなぜ止まらない
2. 農業経済はなぜ敗退するか
3. インフレのメカニズム
4. 貿易はなぜ拡大するか
5. ケインズ経済学とは何だったか
6. 金融スーパーハイウェイの出現

という具合になっているが、ではこれらはどの程度まで経済全体をカバーしているのだろうか。それを見るためここでこれを、最も標準的な入門書と見られている「ゼミナール日本経済入門」(日本経済新聞社・85年)の目次と突き合わせてみよう。同書はとにかく経済全般にわたつて百科事典的にくまなくカバーすることを目的としており、そのため同書の内容をフォローできれば、一応この主題選択がバランス良く経済全般に及んでいると見てよいはずである。

では具体的に「ゼミナール日本経済入門」の目次を見てみると

1. 日本経済TODAY
2. 変わる産業構造
3. 経済成長の新時代
4. 物価を考える
5. 財政危機の構図
6. 進む金融革命
7. 貿易摩擦の政治経済学
8. 円と変動相場制
9. 景気の見方教えます
10. 変革期の企業経営
11. 日本の経営の秘密
12. 活力ある消費社会の構築

となっているが、このうち最初の1および末尾の9～12の部分は時事問題と当時の日本特有の問題を論じた章であり、それは一応除外してよい。そのためこのうち2～8までの

主題を網羅できれば、一応普遍的な経済の基礎はカバーできるはずだと見て差し支えないことになる。

ではそれらの主題が本書の各章にどのように対応しているかを見てみると

「ゼミナール日本経済」	本書
2. 変わる産業構造	第2章「農業経済はなぜ敗退する」が要点をカバー
3. 経済成長の新時代	第1章「資本主義経済はなぜ止まらない」が要点をカバー
4. 物価を考える	第3章「インフレのメカニズム」が要点をカバー
5. 財政危機の構図	第5章「ケインズ経済学とは何だったか」が要点をカバー
6. 進む金融革命	第6章「金融スーパーハイウェイの出現」が要点をカバー
7. 貿易摩擦の政治経済学	第4章「貿易はなぜ拡大するか」が要点をカバー
8. 円と変動相場制	付録Aと付録Bが要点をカバー

という具合に対応づけられることになり、これを見る限りでは本書の章の選択が、最重要領域だけは一応カバーしていることがわかるであろう。(ただし、「ゼミナール日本経済入門」は単に比較のための一例として採り上げただけであり、別に本書がそのコバンザメ的な副読本として構成されているわけでは全然ない。)

ところで本書の場合、それぞれの解説は前述のように「経済を遅くする」にはそのメカニズムのどこがネックになるかということを中心課題に据えて論じられているため、現状の経済の解説だけで話を終えてしまったのでは、いささか尻切れとんぼのそしりは免れないことになる。そこでその課題に対してある程度の指針を与えるため、第7章「経済を遅くする力をどこから調達するか」を設けて、一応の示唆を行なっている。

そして実を言えばある意味でこの部分こそが本書の本来の出発点であり、およそ分野違いの物理学という世界を生きてきた私のような人間がこんな本を書いた理由も、突き詰めればここにあったのである。

詳しくは後記で述べたいが、本書は最初、私の率いる「パスファインダー物理学チーム」で、内部で使うための教科書として書かれたものだった。このチームの目的は文系でさじを投げてしまった文明レベルの難問に、主として物理学出身の優秀な若手を投入して何らかの解答を出すことにある。

そしてその難問のうち、最も優先順位の高いものとして設定されたものが「暴走する資本主義経済を遅くする」という課題に取り組んで、物理学の手法を活かして突破口を発見するということがあった。実際先ほどから言うように環境問題などにしても、その難題を突破できないことにはいかなる解決策も焼け石に水であり、それはみんなでログハウスに住んで節約に励んだぐらいでは到底追いつかない、というよりむしろその解決策が下手に効果を上げてしまえば不況を引き起こしてしまうため、経済面からの挫折を運命づけられているとさえ言える。

しかし本気でその手段を探求しようとするれば、それはこれまで経済を高速化させてきたものに劣らないほどの高度な設計図をもって、経済システムの一番の中枢部に切り込む以

外どうしようもない。ところがそこで、今まで理系の勉強をしてきた者が経済を（粗筋だけでも）どうやって効率良く理解するかという問題がまさに立ち塞がってしまった。そのため内部でそのための特殊な教科書が切実に必要となり、そうやって使われていたテキストに手を加え、理系以外の読者にも読めるようにしたのが本書だというわけである。

このため「経済を遅くする」という主題がどうしても最後まで骨格部分に残ることになり、ある意味で本全体が二重の目的をもつ、つまり「非経済人」の目でとりあえず現在の資本主義のメカニズムを最低限理解しておくための部分と、具体的にその方法を考えるための部分の二重性をもつことになった。もっとも読者は本書をどちらの目的にも使えるし、その際それらは互いに邪魔をせずむしろ相乗効果として作用するようになっている。

ともあれ本書は、経済新聞の中身が一言もわからない読書人や理系研究者（場合によっては経済学部の学生なども）が、とにかくこれ一冊さえ読めばどうにかなるといふ目的のために最も活躍すべき本である。また環境問題研究の現場などを見ても、経済の知識の不足による障害には予想以上のものがあり、そのためだけにでも本書は役に立つはずである。そしてこういう目的のためには、著者が分野違いで経済のインサイダーとは異なる肌合いをもつことは、むしろ有利に作用することだろう。

さらにより一般に、時事問題としての経済に関して表面的な知識だけはかなりもっているものの、基礎の部分がどうなっているかが今一つわからないという人が、その欲求不満を解消するための用途としても、恐らく本書は有効であろうと思われる。（ただ本書の場合、コンパクトにすることを最優先としたため、とりあえず現在の経済を理解するうえで当面必要性の低いものは削除せざるを得ず、それらは機会があれば改めて「中級編」として一冊にまとめたいと思う。）

いずれにせよ、以上のような読者の多くは、たとえ昨日まで経済の知識がほぼゼロだったとしても、本書1冊を熟読すれば、少々危なっかしいながらもエコノミスト相手にいっぱしの議論が出来るまでになることを期待してよいはずである。

なお重度の経済アレルギーでそれさえ億劫だという読者は、必ずしも本書全部を読破せずとも、最低限第1章の僅か数十ページほどを読むだけでも、とりあえずかなりの成果を期待できるものと思われる。実際に内部での使用実績から見ても、この部分には現代経済を理解するいわば勘所のような部分が集中しているらしく、そうした読者に対して絶大な効果を発揮していたからである。

現代経済学の直観的方法 -- 目次

第 1 章 資本主義経済はなぜ止まらない

1.1 資本主義経済の中枢部を解剖する

§ 止まらない資本主義	・・・	17
§ 資本主義の成長スピード	・・・	18
§ 軍事史と鉄道	・・・	19
§ 経済社会の「鉄道網」	・・・	21
§ 中世世界と貯蓄	・・・	22

1.2 経済社会の「鉄道網」と資本主義の恐ろしく不安定なメカニズム

§ 貯蓄のもつ二つの意味	・・・	25
§ 金貨の循環がもし目で見えたら・・・	・・・	25
§ 貯蓄で社会が貧しくなる・・・	・・・	26
§ パン屋の事業拡大	・・・	30
§ いかに貯金は還流されるか	・・・	30
§ 間違いじみたサイクル	・・・	32
§ 意外な一致	・・・	34
§ 経済政策当局の目から見ると・・・	・・・	35
§ 経済学を学んでいる人へのコメント	・・・	36

1.3 文明は如何にしてそれを選択したか

§ 金利が容認されるに至った文化的背景	・・・	38
§ ウェーバーの伝えるカルビニズムの真実	・・・	39
§ 切断された相互扶助の糸	・・・	40
§ 資本主義の必要性の「三要素」	・・・	41
§ イスラム世界の資金調達方法	・・・	43
§ 現代イスラムの「無利子銀行」	・・・	44
§ 資本主義の命運	・・・	45
§ 資本主義の「利己的遺伝子」	・・・	47
§ 金融危機を経ての補足	・・・	48
§ 要約	・・・	52

第 2 章 農業経済はなぜ敗退するか

2.1 産業の機動性

§ ペティ・クラークの法則	・・・	54
§ 徳川政権の経済問題	・・・	55
§ 農業と機動性	・・・	56
§ 徳川政権のジレンマ	・・・	57
§ 現代の原料産出国の悲惨	・・・	59
§ 産油国の反撃	・・・	61

§ 商工業側の苦勞	．．．	6 2
§ 需要拡大の歴史	．．．	6 4
§ 要約	．．．	6 6
§ 需要の将来	．．．	6 7

第 3 章 インフレとデフレのメカニズム

3 . 1 インフレのメカニズム

§ ドイツの天文学的インフレーション	．．．	7 0
§ インフレ状態の図式化	．．．	7 1
§ 循環作用の中のインフレ	．．．	7 3
§ サーキットのボトルネック	．．．	7 4
§ フィリップス曲線	．．．	7 5
§ 「貨幣の中立性」という考え方	．．．	7 6
§ インフレで誰が得をするか	．．．	7 7
§ 政策当局にとってのインフレ	．．．	7 9
§ デフレの場合	．．．	8 1
§ 経済戦術の傑作 - - 日本の「傾斜生産方式」	．．．	8 3
§ 要約	．．．	8 5

3 . 2 経済学理解のための第二の突破ポイント

§ 経済学を理解する時のもう一つの難関点	．．．	8 6
§ 「高金利」「低金利」を鉄道でどう表現するか	．．．	8 8
§ 高金利状態の表現	．．．	9 0
§ 低金利状態の表現	．．．	9 1
§ 「直接金融」と「間接金融」の描き分け	．．．	9 2
§ 経済の第二難関点の「見える化」	．．．	9 3

第 4 章 貿易はなぜ拡大するか

4 . 1 貿易のメカニズム

§ 貿易を行なう理由	．．．	9 7
§ 貿易の生み出す巨大な利益	．．．	9 8
§ 貿易の力学	．．．	9 9
§ 利益の取り分の国家への移行	．．．	1 0 0
§ 自由貿易体制の登場	．．．	1 0 1

4 . 2 貿易の歴史

§ 没落してしまった「商業民族」	．．．	1 0 4
§ オランダ - - 繁栄を支えたバルト海の穀物輸送ルート	．．．	1 0 4
§ 英国の場合 (1) - - 毛織物、毛織物、毛織物	．．．	1 0 6
§ 英国の場合 (2) - - 自由貿易論の登場	．．．	1 0 8
§ 米国 - - 南北戦争の舞台裏	．．．	1 0 9

§ 日本の場合（１） - - 近代化の生命線だった「絹の道」	・ ・ ・ 1 1 1
§ 日本の場合（２） - - 重工業への移行	・ ・ ・ 1 1 2
§ 「中世自由貿易圏」としてのイスラム世界	・ ・ ・ 1 1 3
§ 要約	・ ・ ・ 1 1 5
§ 現在の状況 = 新興国台頭の背景	・ ・ ・ 1 1 6
§ 「第二段目」で状況は変わった	・ ・ ・ 1 1 7
§ 将来への懸念	・ ・ ・ 1 1 8

第 5 章 ケインズ経済学とは何だったか

5 . 1 ケインズ経済学の概要

§ ファラオの名誉回復	・ ・ ・ 1 2 0
§ 奇妙な石油ポンプ	・ ・ ・ 1 2 1
§ ケインズ的な経済観	・ ・ ・ 1 2 2
§ 金貨と銀貨の経済効果	・ ・ ・ 1 2 3
§ 乗数効果のメカニズム	・ ・ ・ 1 2 4
§ 大恐慌下でのケインズの挑戦	・ ・ ・ 1 2 5
§ 新旧学派の言い分	・ ・ ・ 1 2 7
§ 中世にはこの問題はどうか	・ ・ ・ 1 2 8
§ ケインズ経済学の泣き所	・ ・ ・ 1 3 0
§ ケインズ政策の暴走	・ ・ ・ 1 3 1
§ 要約	・ ・ ・ 1 3 3

5 . 2 ケインズ経済学誕生の真相

§ 「真の資本主義」でなかった英国経済の弱点	・ ・ ・ 1 3 4
§ 意外に未発達だった英国の金融	・ ・ ・ 1 3 5
§ そんな英国の資金循環方法	・ ・ ・ 1 3 6
§ ケインズの危機意識とその姿勢	・ ・ ・ 1 3 8
§ 企業家層 v s 投資家層	・ ・ ・ 1 3 9
§ ケインズ経済学とは何だったか	・ ・ ・ 1 4 1
§ 経済学の系譜	・ ・ ・ 1 4 2

5 . 3 なぜこの本で述べた二つのポイントが最重要突破点となるのか

§ 経済世界の何がコアを構成しているか	・ ・ ・ 1 4 7
§ I S 曲線の概略	・ ・ ・ 1 4 9
§ 両者の話の本質的関連性	・ ・ ・ 1 5 0
§ 疑問点とその答え（１）・なぜこれが第二のコアたりうるか	・ ・ ・ 1 5 3
§ 疑問点とその答え（２）・第二のコアは必ず発生する	・ ・ ・ 1 5 4
§ 浮かび上がってくる「第二のコア」のイメージ	・ ・ ・ 1 5 5
§ 金額面でのコアの規模	・ ・ ・ 1 5 7
§ L M 曲線の問題点	・ ・ ・ 1 5 8
§ 経済学者たちの興奮	・ ・ ・ 1 6 0

§ 初めて見えた核 = コアの姿	・・・ 160
§ 経済世界にこれ以上大きなコアは発生しない	・・・ 163
§ 読者はついに壁を超えた	・・・ 164

第6章 金融スーパーハイウェイの登場

6.1 金融危機前に起こっていた大変化

§ 驚くべき立場の逆転	・・・ 166
§ 「補給革命」のもたらす経済戦略の変化	・・・ 167
§ 現代の経済戦争 - - 金融スーパーハイウェイ vs 国民経済	・・・ 168
§ 金融スーパーハイウェイの起源 - - 英国のビッグバン	・・・ 169
§ 大変動の序曲	・・・ 170
§ 新しい経済人の常識	・・・ 171

6.2 数十年前の大恐慌時との比較

§ 第一次金融スーパーハイウェイ? - - 悲劇の金本位復帰	・・・ 173
§ 金融スーパーハイウェイの欠陥	・・・ 175
§ 破綻のその後 - - ブロック経済への移行	・・・ 176
§ 大恐慌の概略	・・・ 177
§ 大恐慌の要因はどう解消されたか	・・・ 178
§ それ以後から金融危機前夜まで	・・・ 179
§ 問題再燃の不気味な予兆	・・・ 181

6.3 「2008年 = 百年に一度の金融危機」とその後の世界

§ その後の経過	・・・ 183
§ これから出てくる第二の問題点	・・・ 184
§ 大恐慌と同じ回復手段は使えるか	・・・ 186
§ かつてローマでそれは起こった	・・・ 187
§ 「プロテスタンティズムの倫理」の崩壊	・・・ 189
§ 日本が直面するもの	・・・ 191
§ それを逆手にとる戦略	・・・ 193
§ 眠っている一つの希望	・・・ 194

第7章 資本主義にブレーキをかける力をどう調達するか

7.1 経済を遅くする力学

§ 経済を遅くすることの本質的困難	・・・ 196
§ 盲点だった「想像力」の意義	・・・ 196
§ その経済への意外な影響力	・・・ 198
§ 現代の閉塞感の根源	・・・ 199
§ 基石の概念の導入	・・・ 200
§ 資本主義社会の人間の精神状態はどう表現されるか	・・・ 202

§ ジョイントの発生とアイドル等の機能	・・・	203
§ 呼吸口の数え方	・・・	205
§ 経済を遅くする力学	・・・	206
§ このシステムは力を持ち得るか	・・・	209
§ 将来への展望	・・・	211
§ 要約	・・・	212
付記・「人を追い出す」資本主義にどうブレーキをかけるか	・・・	214
§ 消費需要の新しい糸口	・・・	215

付録 A 貨幣はなぜ増殖するか ・・・ 218

§ モンゴル型紙幣とイングランド型紙幣	・・・	219
§ 磁石のような貨幣	・・・	220
§ 磁石はどこまで増殖できるか	・・・	221
§ 貨幣の増殖過程	・・・	223
§ 現代の貨幣増殖過程	・・・	224
§ 貨幣の増殖過程(2)	・・・	225
§ 定量的な増殖メカニズム	・・・	228
§ なぜ社会はこの増殖を容認したか	・・・	230
§ 金本位制度の弱点	・・・	232
§ 要約	・・・	234

付録 B ドルはなぜ国際経済に君臨したか

B.1 ドルから見た国際通貨

§ 国際経済に君臨するドル	・・・	236
§ ドルの奇妙な変貌	・・・	237
§ ドルのジレンマ	・・・	239
§ ジレンマの本質	・・・	240
§ 国際通貨の困難の根源	・・・	242
§ ドル以外の選択なし - 「モンゴル型」への変貌	・・・	243
§ 円の基軸通貨への道は遠かった	・・・	245

B.2 過去の国際通貨はどうだったか

§ イスラム貨幣はどうだったか	・・・	246
§ ポンドの場合	・・・	247
§ 金本位への奇妙な愛情	・・・	248
§ 金本位制の一見魅力的なメカニズム	・・・	249
§ その意外な落とし穴	・・・	251
§ これらの比較	・・・	253
§ 問題の対応への3つのパターン	・・・	254
§ 現在の状況	・・・	255